

事例 9

～地域を主体とした組織による小水力発電事業による地域貢献の事例～

大日止昂小水力発電事業

■事業及び発電設備の概要

本事業は、宮崎県日之影町大人地区にある大人用水組合の構成員を母体とした大人発電農業協同組合による農業用水路を活用した小水力発電事業である。稲作を優先し、非灌漑期のみ発電を行う。

同地区でも年々深刻化している高齢化の問題は、棚田や農業用水路の維持管理を困難にさせるだけでなく、集落で引き継がれてきた神楽や農村歌舞伎などの伝統芸能の継承も難しくしていた。

そこで、平成 25 年、地区の農業や伝統芸能など、集落の暮らしを支えるための事業として地区の資産である農業用水路と高低差のある地形を利用した、小水力発電事業が計画された。約 4 年間の調査、設計、組織づくり、資金調達等の検討後、平成 29 年 11 月 1 日より、発電出力 49.9kW、年間発電電力量約 32 万 kWh の大日止昂小水力発電所が運転を開始した。

■事業実施上の課題（地域での合意形成）

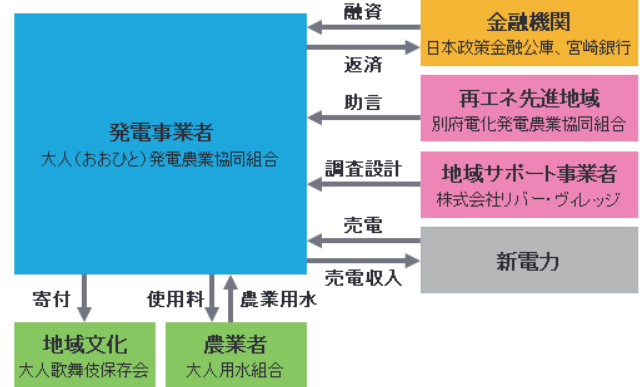
日之影町大人地区の農業用水路を管理する大人用水組合の役員は、自分たちの手でエネルギーを作り出し売電収入を地域の活性化に活用する仕組みを大人地区に導入できないかということを考えていたが、それには、地域での合意形成が必要であった。

そこで、まず、大人用水組合に加盟している全戸の農家の方々を対象とした、水力発電への理解を深めるための勉強会を開始した。

勉強会で今回の取組みの将来的な意味をみんなで話し合い、管理している農業用水路を維持していくためには、維持管理費用や災害によるリスクの負担等の観点から資金の確保が必要であり、現状のままでは今後維持していくことができないという考えに至り、水力発電に取組んでいきたいという話になった。

勉強会は、着工までの間、1 か月に 1 回程度の頻度で開催された。勉強会においては、自分たちがこれまで 100 年間にわたり農業用水路の恩恵を受けて水田を耕してきたが、耕作放棄地が目立つようになった中で、次世代にどのように引き継げばよいのかというような課題の共有を行ったり、100 年前の開拓当時の借金の話を紐解いて借入リスクにどのように対処していけばよいのかというような検討を行ったりもした。勉強会における様々な話し合いを経て、地域の合意形成がなされ、平成 28 年に事業主体である大人発電農業協同組合の設立につながった。

■事業の実施体制



石積みの発電所建屋

■地域貢献の内容

売電収入は農業用水路の維持管理のほか、公民館活動の支援や文化芸能の維持にも活用する。

将来的には、改良区管理のために組合員が納める賦課金の負担をなくすことを目指す。また、農業用水路、耕作地の次世代への引継ぎにおける課題解決にも活用する。売電先の地域新電力会社とは、単なる電力の売買取引関係だけではなく地域貢献等も含めたパートナーシップ契約を締結している。地域の祭において共に神輿を担ぐなど、地域住民と同社社員との交流を進めながら、地産地消の取組をどのように実施していくかを検討している。今後は、集落の維持管理を続けながら、次世代の活動へ再投資を行っていきたいと考えている。

■問い合わせ先

株式会社リバー・ヴィレッジ

住所：福岡県福岡市西区今宿 1-20-16

URL：https://www.ri-vi.com/